

日蓮大聖人御書全集

けんちようじどうりゆう

ごじよう

建長寺道隆への御状

新版
859
〜
860

けんちようじどうりゆう

ごじよう

建長寺道隆への御状

ぶんえい

ねん

がつ

にち

さい

どうりゆう

文永5年（'68）

10月11日

47歳

道隆

そ

ぶつかくのき

なら

ほうもんおく

いた

ぶつぼう

はんえい

しんどく

夫れ、仏閣軒を並べ、法門屋に拒る。仏法の繁栄は身毒・

しな

ちようか

そうほう

ぎようぎ

ろくつう

らかん

支那に超過し、僧宝の形儀は六通の羅漢のごとし。しかり

いちだいしよきよう

しようれつ

せんじん

し

といえども、一代諸経においていまだ勝劣・浅深を知ら

きんじゆう

おな

さんとく

しやかによらい

ず、しかしながら禽獣に同じ。たちまち三徳の釈迦如来を

なげう

たほう

ぶつぼさつ

しん

ぎやくろかやだ

もの

抛って、他方の仏菩薩を信ず。これ、あに逆路伽耶陀の者

ねんぶつ

むけんじごく

ごう

ぜんしゆう

てんま

しよい

しんごん

にあらずや。念仏は無間地獄の業、禅宗は天魔の所為、真言

ほうこく

あくほう

りつしゆう

こくぞく

もうせつうんぬん

は亡国の悪法、律宗は国賊の妄説云々。

ここに、日蓮、去ぬる文応元年の比勘えたるの書をにちれん い ぶんおうがんねん ころかんが しよ

りつしようあんこくろん

な

やどやのにゆうどう

こさいみようじどの

立正安国論と名づけ、宿屋入道をもつて故最明寺殿にたてまつ

しよ

しよせん

ねんぶつ

しんごん

ぜん

りつとう

あくほう

奉りぬ。この書の所詮は、念仏・真言・禅・律等の悪法を

しん

ゆえ

てんか

さいなん

お

たこく

信ずるが故に、天下に災難しきりに起こり、あまつさえ他国

くにせ

よし

かんが

よりこの国責めらるべきの由、これを勘えたり。

い

しょうがつじゅうはちにち

ちようじようとうらい

にちれん

しかるに、去ぬる正月十八日、牒状到来すと。日蓮が

かんが

すこ

たが

ふごう

しよじ

これを勘えたるところに少しも違わず符合せしむ。諸寺・

しよさん

きとう

いりきめつ

ゆえ

あくほう

ゆえ

諸山の祈禱の威力滅するが故か、はたまた悪法の故なるか。

かまくらじゆう

じようげばんにん

どうりゆうしようにん

ほとけ

あお

鎌倉中の上下万人、道隆聖人をば仏のごとくこれを仰

りようかんしようにん

らかん

たつと

ほか

ぎ、良観聖人をば羅漢のごとくこれを尊ぶ。その外、

じゆふくじ

たほうじ

じようこうみようじ

りようらくじ

だいぶつでん

ちようろうとう

寿福寺・多宝寺・浄光明寺・長樂寺・大仏殿の長老等は、

がまん

こころじゆうまん

え

おも

え

「我慢の心充滿す」「いまだ得ざるを謂つて得たりとなす」

ぞうじようまん

だいあくにん

なん

もうここく

たいへい

じようぶく

の増上慢の大悪人なり。何ぞ蒙古国の大兵を調伏せしむ

にほんこくじゆう

じようげばんにん

い

べけんや。あまつさえ、日本国中の上下万人ことごとく生

ど

な

こんぜ

くに

ほろ

ごせ

かなら

け取りと成るべく、今世には国を亡ぼし、後世には必ず

むけん

お

無間に堕ちん。

にちれん

もう

おんもち

な

こうかい

あ

日蓮が申すことを御用い無くんば、後悔これ有るべし。

おもむき

かまくらの

やどやのにゆうどうどの

へいのさえものじようどのとう

この趣、鎌倉殿・宿屋入道殿・平左衛門尉殿等へこれ

しんじよう

そうろう

いつしよ

よ

あつ

ごひようぎあ

を進状せしめ候。一処に寄り集まつて御評議有るべく

そうろう

にちれん

しきよく

ぎ

きようろん

もん

まか

候。あえて日蓮が私曲の義にあらず、ただ経論の文に任

すのところなり。

しめん

の

がた

たいけつ

とき

ご

つぶさには紙面に載せ難し。しかしながら対決の時を期

しよ

ことば

つ

ことば

こころ

つ

きようきようきんげん

す。書は言を尽くさず、言は心を尽くさず。恐々謹言。

ぶんえいごねんつちのえたつじゅうがつじゅういちにち

にちれん

かおう

文永五年戊辰十月十一日

日蓮

花押

しんじよう

けんちようじどうりゆうしようにんじしやおんちゆう

進上 建長寺道隆聖人侍者御中